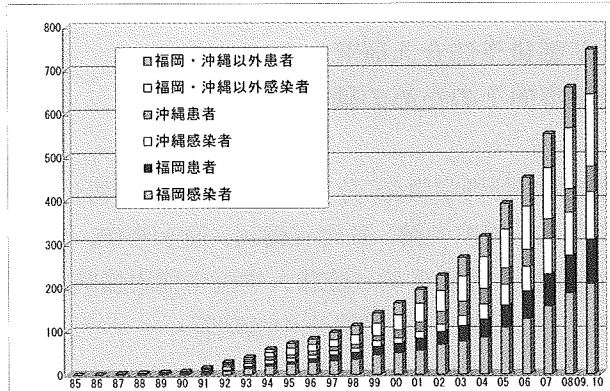
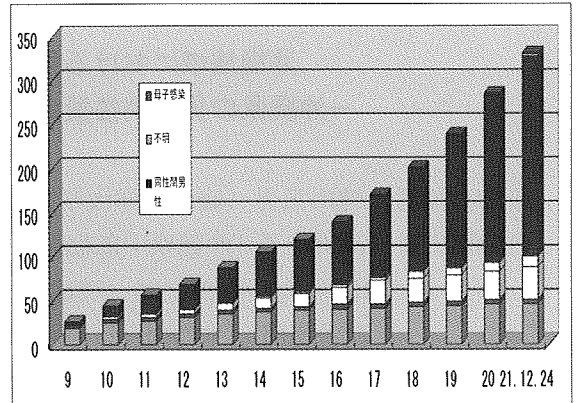


- 2) 山本政弘：シンポジウム「HIV 感染対策におけるパートナーシップ-自治体と NGO の協働」「NGO と地方行政の連携」. 第 23 回日本エイズ学会学術総会, 平成 21 年 11 月 28 日, 名古屋.
- 3) 山本政弘：サテライトシンポジウム「HIV 陽性者のメンタルヘルスへのアプローチ～心理職が目指す予防とケアについての検討 その 1～」 「～精神科の連携について～内科医の立場から」. 第 23 回日本エイズ学会学術総会, 平成 21 年 11 月 26 日, 名古屋.
- 4) 川本大輔、樋脇弘、高橋真梨子、南留美、山本政弘：福岡地域における HIV 感染者および AIDS 患者から分離された HIV の遺伝子解析. 第 23 回日本エイズ学会学術総会, 平成 21 年 11 月 28 日, 名古屋.
- 5) 高濱宗一郎、安藤仁、南留美、山本政弘：RAL/ATV/RTV によるダブルブースト療法が奏効した吸収不良 HIV 感染症の 1 例. 第 23 回日本エイズ学会学術総会, 平成 21 年 11 月 28 日, 名古屋.
- 6) 新ヶ江章友、金子典代、塩野徳史、牧園裕也、川本大輔、新納利弘、濱田史朗、橋口卓、北村紀代子、山本政弘、市川誠一：福岡におけるゲイ向け商業施設利用者を対象とした質問紙調査. 第 23 回日本エイズ学会学術総会, 平成 21 年 11 月 28 日, 名古屋.
- 7) 服部順子、瀧永博之、吉田繁、南留美、山本政弘、杉浦互、他：2003-2008 年の新規 HIV/AIDS 診断症例における薬剤耐性頻度の動向. 第 23 回日本エイズ学会学術総会, 平成 21 年 11 月 28 日, 名古屋.
- 8) 菊池嘉、岩本愛吉、佐藤典宏、伊藤俊広、田邊嘉也、横幕能行、上田幹夫、渡邊大、藤井輝久、南留美、宮城島拓人、建山正男：多施設共同疫学調査における HAART の有効率. 第 23 回日本エイズ学会学術総会, 平成 21 年 11 月 28 日, 名古屋.
- 9) 南留美、高濱宗一郎、安藤仁、山本政弘：抗 HIV 剤は HBV 感染肝細胞における肝脂質代謝を促進する. 第 23 回日本エイズ学会学術総会, 平成 21 年 11 月 28 日, 名古屋.

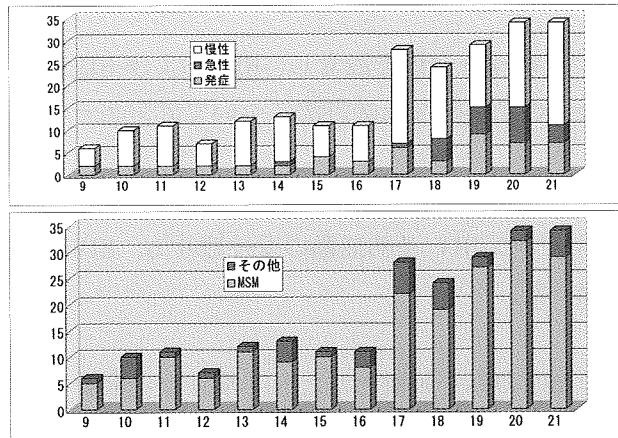
九州におけるHIV感染者/AIDS患者累計報告数



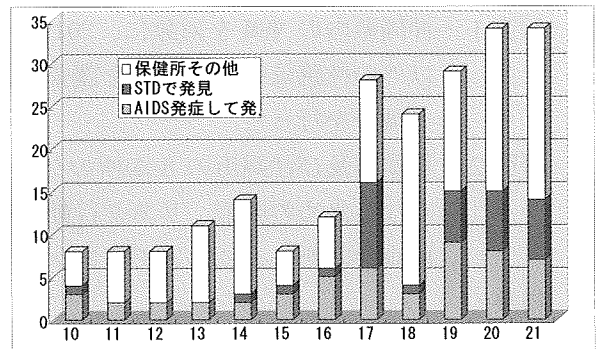
九州医療センターにおける受診患者数



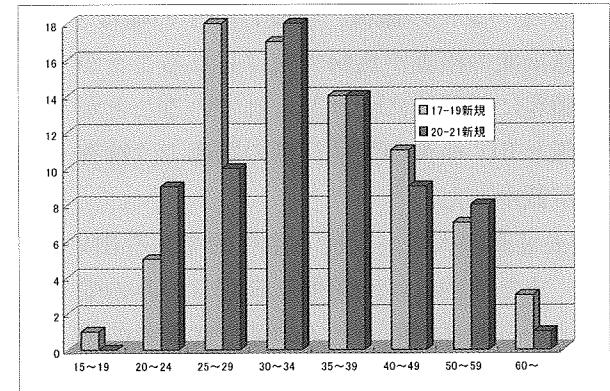
新規に感染が診断された患者の解析



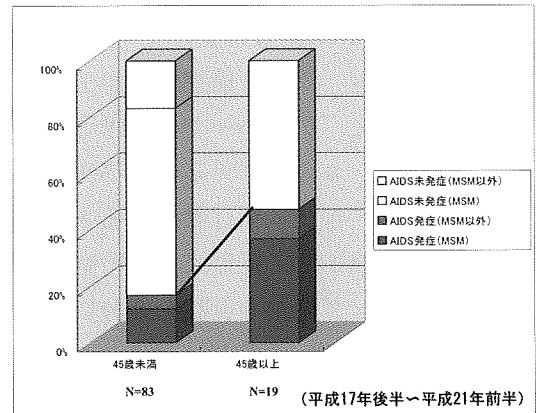
新規感染者における感染判明契機



新規に感染が判明した患者の当院初診時年齢分布における平成17~19年と平成20~21年の比較



当院受診した新規に感染が判明した患者（つまり転居者などは除く）のうちすでにAIDSを発症していた患者の割合



沖縄地域における男性同性間の HIV 感染予防介入研究
ー沖縄県の男性同性愛者の HIV 検査受検率向上のための調査ー

研究分担者：健山正男（琉球大学大学院医学研究科感染症制御学講座 分子病態感染症学分野）
研究協力者：宮川桂子（沖縄県中部福祉保健所），仲村秀太，田里大輔，日比谷健司，原永修作，
比嘉 太，藤田次郎（琉球大学医学部附属病院），宮城京子（琉球大学医学部附属病
院看護部），仲宗根正（沖縄県中央保健所），椎木創一（沖縄県立中部病院），
仲程ひろみ（沖縄県立南部医療センター・こども医療センター）

研究要旨

目的：男性同性愛者（以下：MSM）のみを対象とした日曜日 HIV スクリーニング検査を実施し、無症状のキャリアを早期発見して医療機関につなぐことを目的とした。副目的として個別施策層における検査回避の要因をアンケート調査してその改善策を検討した。

研究方法：

研究 1：沖縄県内の MSM を対象に、2010 年 1 月 31 日に日曜検査会場を設営し、HIV および HIV 以外の性感染症の浸淫度を調査した。また検査会の効率的な周知方法についてアンケート調査を行った。

研究 2：那覇市及び沖縄市の 8 か所のゲイバーの顧客を対象に、HIV 受検行動調査、受検しやすくなるための要因、リスク行動の有無、ゲイバーでの HIV 予防活動の受け取り方、HIV 検査会のあり方についてアンケート調査を行なった。

結果：

研究 1：前年度に引き続いて実施された中央保健所での MSM のみを対象とした HIV 検査の受検者数は 58 人であり、1 日の受検者数としては過去最高であった。アンケート回収率は 98.2%であった。年齢は 20 代、30 代で 92%を占めた。検査回数は 1 回以下が 46%を占めた。検査会開催の情報入手はネットおよび MSM 向け商業施設で 75%と最も多かった。ゲイバーでの HIV 関連資材の提供について 86%が積極的に支持した。

研究 2：那覇市及び沖縄市の 8 か所のゲイバーの顧客を対象にアンケート調査を行い、111 件の有効回答を得た。年齢分布は 30 代、次いで 40 代が多かった。HIV 検査経験の有無はほぼ半々であった。HIV 検査を受けやすくする要因として、①プライバシーの確保 ②受けやすい曜日・時間の設定 ③当日検査結果が分かること ④他の性感染症の検査が無料で受けられることが挙げられた。ゲイバーでの HIV 予防啓発活動は 95%の顧客に好意的に受け取られていることが分かった。コミュニティーレベルでのリスク行為の有無と HIV 検査の受検行動の関連では検査を受けるべきリスク行動のある人に受検経験者の割合が低かった。

考察：今回の HIV 検査会は 1 日の受検者数では 58 人と過去最高の人数が受検し主目的である HIV スクリーニング検査の役割を十分に担ったと評価できる。また前回は 4 回開催し日曜日のみの受検者数は 46 人で、今回は 1 回のみで開催で前を上回った。日曜日開催のための医療従事者の確保が困難な状況を勘案すると、検査日を増やすことなく周知法の改善策をはかることで持続可能な検査体制が確立できることが実証された。一方、MSM 商業施設におけるアンケート調査では検

査受検に対して多様な意見があり、検査機会を複数の選択枝から選択できる体制を提供することが必要と思われた。ゲイバーでの資材提供と HIV 予防啓発活動は大多数に支持されることが判明した。

結語：

1. MSMのみを対象としたHIV検査会は開催日を増やさず広報に主眼をおいて、1回開催でも十分に受検者を増加することができる。

2. HIV受検のための検査機会を多様な選択枝から提供できる体制が必要である

本研究は厚生労働省エイズ対策研究事業として実施し、沖縄県中央保健所の全面的協力を得て施行した。

A. 研究目的

研究1：HIV 検査会開催および周知方法に関するアンケート調査

沖縄県における HIV 感染者の増加は 1999 年より顕著となり、2007 年の人口 10 万人あたりの新規感染者は 2.58 人と全国で 2 番目に高い陽性率となった。また 2008 年度も 3 位であり、その 85%以上を MSM が占める。AIDS の届出は全体の 30%であるものの、治療開始基準となる CD4 陽性 T リンパ球が 350cells/ μ L 未満が全体の 83%であり、HIV と行政的に区分されても病期が進行して発見される例が多いことが判明した。

以上より、沖縄県における HIV 感染の増大は大部分が MSM 間で起きており、病期の進行した症例が 83%を占めていることが明らかとなり、MSM における検査受検率を現状よりも高めて、感染者を速やかに医療機関へとつなぐことが喫急の課題と言える。さらにこれらの個別施策層における検査回避の要因を明らかにすることも求められる。

これらの背景から、今回は沖縄県内の MSM を対象に、本県では 2 回目となる HIV 検査会を実施し効率的な検査会開催のためのアンケート調査を行った。

研究2：ゲイバーにおける HIV 受検行動に関するアンケート調査

ゲイコミュニティレベルにおける、HIV 受検行動調査と、受検しやすくするための要因、リスク行動の有無と受検歴、ゲイバーでの HIV 予防活動の受け取り方などを調査し、

今後の HIV 検査体制、予防活動のプログラム作成資料とした。

B. 研究方法

研究1：HIV 検査会開催および周知方法に関するアンケート調査

1. 組織

実施者は、日常 HIV-1 感染者診療および検査に携わる医師、看護師、検査技師で構成した。

琉球大学医学部附属病院 医師、看護師

南部医療センター 看護師

中部病院 医師

沖縄中部福祉事務所 医師

沖縄県中央保健所 保健師、検査技師

2. 受検対象者

自らの意志で来所した MSM であること、および HIV 検査受検希望を書面にて回答したもの。

3. 研究期間

平成 21 年 1 月 31 日（日曜日）午前 11 時～午後 5 時

4. 実施場所 沖縄県中央保健所

5. 実施方法

1) 広報活動

沖縄県男性同性愛者 HIV 予防啓発団体 (NANKR) のネットワークを中心として、男性同性愛者対象の商業施設への広報誌配布、インターネット等を使った情報発信、携帯電話出会い系サイト、口コミなどを伝搬手段とした。

2) HIV 検査の実施方法

a. 電話での予約制。(中央保健所感染症担当が

担当)

- b. 来所時、相談室へ案内し、検査及の概要を文書を用いて説明し、文書にて同意を取る。
- c. 問診票に記入後、採血・採尿・咽頭ぬぐい液を採取する。
- d. 結果返しの時刻を伝え、待機時間に、同意の得られた者に対して自記式の匿名アンケートへの記入をお願いする。
- e. 結果お知らせの時刻には、再び相談室へ案内し、結果を知らせる。
- f. 必要時にはカウンセリングを行う。

6. 検査項目

- 1) 抗HIV抗体, 2) 抗クラミジア・トラコモティス, 3) 抗B型肝炎ウイルス抗体・抗原, 4) 抗C型肝炎ウイルス抗体, 5) 抗TPL抗体・抗カルジオリピン抗体.

7. アンケート内容

- 1) MSM 調査対象は検査受検時に MSM と回答した者の中で、アンケート調査に協力を得られた 58 名に配布し、回収された 57 件を対象とした。(回収率 98.2%)。
- 2) アンケート配布および回収法
 - a) 事前に口頭でアンケート調査の趣旨説明を行った。
 - b) 参加の同意を得られた者に、アンケートを配布した。
 - c) 無記名の自記式質問紙調査法。
 - d) 回収法はアンケート箱への投函または無記名の封筒による郵送で匿名性を担保した。
- 3) アンケート概要
 - a) 本研究にて独自に作成した。
 - b) 原則として 5 段階スケール評価を採用した。
 - c) 回答者属性に関する質問群
 - ア. セクシャリティ, イ. 年代(階層式), ウ. 居住歴
 - d) 検査会開催に関する質問群.
 - ア) 情報の入手先, イ) 検査受検歴と回数, 最後の検査の時期, ウ) 今後の検査希望の有無

研究 2 : ゲイバーにおける HIV 受検行動に関

するアンケート調査

1. 組織

琉球大学医学部附属病院 医師
沖縄県立中部福祉事務所 医師
NANKR NGO スタッフ

2. 実施場所

那覇市、沖縄市のゲイバーの経営者で、協力が得られた 8 か所に依頼した。

3. 調査期間 1月25日～29日

4. 実施方法

調査期間中にオーナーから顧客にアンケートを依頼、同意を得られた人にアンケートを記載してもらう。アンケート記載に際してはプライバシーが尊重されるよう配慮を求め、記載後はアンケート用紙を折りたたんで回収ボックスに入れてもらう。回収ボックスにはかぎが掛かっており、鍵を開けるのは回収後、研究協力者のみである。アンケート回収に際しては、一枚当たりバー経営者へ 1000 円の謝金を払い、そのうち 500 円をドリンク券として回答者に還元してもらうよう依頼した。なお、アンケートの協力ゲイバーへの依頼及びアンケートボックスの回収は、研究協力者及び協力団体である NANKR メンバーが行った。

5. アンケート内容

本研究にて独自に作成した。原則として 5 段階スケール評価を採用した。質問は下記の 5 群で構成した。

- 1) 回答者属性, 2) HIV 検査経験と回数, 3) 今回の HIV 検査会受検希望の有無, 4) 受検ための重要な要素, 5) 受検のための重視する環境。

C. 研究結果

研究 1 : HIV 検査会開催および周知方法に関するアンケート調査

1) HIV 検査受検者の属性

検査受検者数は 58 人で中央保健所で受検した MSM の年間平均の受検者数の 44.5%に相当した。年代は 20 代を中心に 30 代が多く、

この2群で92%を占めた(図1)。セクシャリティの自認はゲイを自認する者が80.7%であり、次いでバイセクシャルが17.5%であった(図2)。過去3ヶ月以上の県内在住歴有りは100%であった。

2) 受検回数

初回検査は17.5%、1回目22.8%、2回目が29.8%と2回以下の検査回数受検者は全体の70.2%であった(図3)。

3) 受検者の情報周知の検討

MSM向けの情報サイトの利用はよく利用する(月1~2回以上)が38.6%であった(図4)。ゲイバーの利用率はよく利用する(月1~2回以上)が38.6%、ハッテン場ではよく利用するが28.0%であった。(図5)。検査会開催情報の入手先に関しては(図6)、ネット関連が最も高く(43.9%)、次いでハッテン場やゲイバーなどMSM対象の商業施設が29%で、後者は前回開催よりも12%上昇していた。

携帯サイトと検査情報をリンクした地元のゲイコミュニティNANKRのホームページへの1日平均アクセス数は、前回の90人/日から今回は124人/1日へと増加していた。

研究2：ゲイバーにおけるHIV受検行動に関するアンケート調査

協力を得られた商業施設は8店舗で、アンケート回収数は115件であった。そのうち、女性を除くと113件であった。

1) 回答者属性

年代は30代、次いで40代が多かった。それぞれの年齢層の中間値を代表値として平均をとると、38.1歳であった(図8)。主な居住地は85%が県内、8%が結婚していると回答した。(図9)

2) HIV検査経験及びその結果について

46%がHIV検査を受けたことがなく、53%が検査の経験があると回答している。経験があるもののうち、約3分の1が1年以内に検査を受けていた(図9)。検査を受けた58人のうち、陰性結果であったものが49人、陽性

結果であったものが3名であった。

3) 今回のHIV検査会受検希望の有無(図10)

受検してみたいかどうかの設問に対し、「受けてみたい気がする」と回答した者が37名(34%)であった。

4) 受検ための重要な要素(図11)。

「受けやすい曜日・時間である事」が一番多く85名、次いで、「当日結果がわかること」が69名、「無料の性感染症検査が含まれること」が54名と続いた。一方、「同性愛者のみを対象とすること」や、「保健所以外の場所であること」、「自分の性行動による(コンドームをつけない気になるセックスがあれば受けようと思う。そうでなければ受けないだろう。)」などは重要とされる頻度は低かった。

5) 受検のための重視する環境(図12)

バーの近くで検査が受けられるとした場合に、受ける条件として重要だと思われることを選択肢から3つ選んでもらった。結果は、「プライバシーが守れること」が一番多く90名、次に「その日のうちに結果が分かること」が60名、「無料の性感染症検査が含まれること」が50名となった。

6) ゲイバーでの資材提供に関すること(図13)

HIVやその他の性感染症予防のための啓発資材やコンドームを置くなどの活動がおこなわれることについてどう感じるかを聞く設問には、64人(60%)が「積極的にすべき」、23人(22%)が「当然あっていい」、13人(12%)が「特に気にならない」と、合計で100人(94%)が好意的にとらえていることが判明した。

7) リスク行動とHIV受検状況

アナルセックスでコンドームを「使用しなかった」21人のうち、HIV検査を受けたことがある人は9人(43%)、コンドームを「使用した」55人のうち、HIV検査を受けたことがある人は37人(67%)であった(図14)。

また、過去一年間のパートナーの数が0ないし1人であった50人のうちHIV検査を受けたことがある人は24人(48%)、パートナーの

数が2名以上であった48人のうち、HIV検査を受けたことがある人が25名(51%)であり、パートナーの数と受検行動の関係は上記のような分類では差がなかった(図15)。過去一年間に複数のセックスパートナーがいて、最後のアナルセックスでコンドームを使用せず、かつHIV検査を受けたことがないとした人が5人(全体4.5%)存在した。

D. 考察

HIV検査会のMSMの受検者数は年平均124人で今回の58人は1日で46.8%にあたる検査を行ったことになる。2006年度より経年的に2008年まで男性の受検者数が減少していたことを考えると、今回の検査会は主目的であるHIVスクリーニング検査の役割を十分に担ったと評価できる。また前回は4回開催したが、日曜日みの受検者数46人で、今回は1回みの開催で前回を上回った。日曜日開催のための医療従事者の確保が困難な状況を勘案すると、検査日を増やすことより、周知法の改善策をはかることが持続可能な検査体制確立のために必要と思われた。

多数の受検者を参加させることができた要因として、MSMのみがアクセスするネット関連媒体(携帯サイト、ネット)に広報を行ったこと、研究2と連動したゲイバーでの広報が重要な役割を果たした。

MSMの受検率の向上には、STDの無料検査が重要であること、日曜祝祭日の開催も重要なニーズがあることも前回の調査で判明し、引き続きSTD検査とリンクして開催したことも多数の受検者の確保に役だったと推察された。

研究2ではHIV検査受検行動については、検査経験のある人、ない人がほぼ半々という結果であった。これは、HIV検査に来た人では82.5%が検査経験があり、無い人は17.5%であり、かなり差があることが分かる。

一方で、検査経験のある58人中、HIV陽性であったと答えた人が3人存在し、5.2%となる。これは、高いように思えるが、2005年か

ら2008年に中央保健所でHIV検査を受けた男性同性愛者でのHIV陽性率が3.5~6.1%であった事とも一致する値である。逆にみると、保健所での男性同性愛者のHIV陽性率は、コミュニティレベルでの陽性率とかけ離れていない、という傍証になるかもしれない。

1月31日のゲイ対象HIV及び性感染症無料検査会には、28%の「受ける気はない」とした人以外では、「受けてみたい気がする」「興味はある」「わからない」として、比較的興味はあると考えられる。受けない理由としては、県外在住者であったり、仕事の都合や他に用事があるとした人や、する理由がない、パートナーは一人だけだから必要ない、などとする意見が多い一方で、「ゲイだから行かない」とした人も少数であった。受けない理由に対して、提供する側に改善の余地はあまりないが、あるとすれば曜日(休日)や時間(夜間)を考慮した検査体制、周知に時間をかけることなどが考えられる。

夜ゲイバーの近くでHIV検査が出来る場合の重要な要素に関する問いに対しては、「プライバシーが守れること」「受けやすい日時であること」「無料の性感染症が含まれること」「その日のうちに結果が分かること」の4点があげられる。プライバシーに関しては、得られた情報(アンケートや検査結果)が外に漏れることはないという周知が必要である。一方で、検査に来た人同士が顔を合わせる、あるいは検査を提供する側が顔見知りであるかどうか、ゲイであるかどうかなどを気にすることが多いように思われるが、そもそも、HIV検査を提供する側のメッセージとして、「HIV検査を受けること自体は隠さなければならない・隠れて行わなければならない事ではない」ということを伝えるため、過剰に対応する必要はないのではないかと思われる。ゲイのみを対象とした検査会には行きたくない、と感じる人がいるのは当然であり、一方で、ゲイのみの検査会であるから安心できる、という人もいる。どちらの人にも受けやすい検査機

会を選択できる体制を提供できることが必要である。

ゲイバーでのHIVやその他の性感染症予防のための啓発資材やコンドームを置くなどの活動をするに対しては、ほとんどの人が好意的であり、「気に障る」とした人は5%のみであった。「気に障る」と感じる人を逆なですることなく、しかし、啓発資材やコンドームなどにアプローチしたい人には気軽にアプローチできるような工夫（資材・コンドームなどをトイレに置く、バーの一角に置くなど）をしたうえで、ゲイバーを基に活動することは十分可能であると考えられる。

最後に、今回のアンケートの主な目的の一つである、コミュニティーレベルでのリスク行為の有無とHIV検査への受検行動の関連であるが、検査を受けるべきリスク行動のある人に受験経験者の割合が低いことが分かった。

E. 結語

1. MSMのみを対象としたHIV検査会は開催日を増やすよりも広報に主眼をおいて1回でも十分に受検者数を増加することができる。
2. HIV検査を受けやすくする要因として、①プライバシーの確保 ②受けやすい曜日・時間であること ③迅速検査で当日結果が分かること ④他の性感染症の検査が無料で受けられることが挙げられる。
3. ゲイバーでのHIV予防啓発活動は95%の顧客に好意的に受け取られていることが分かった。

F. 個人情報の管理について

1. 個人情報の紛失、流出、改ざんおよび漏洩などを防ぐため、個人情報を保有するのは研究代表者のみとし、情報管理上問題は発生しなかった。
2. 法令等の順守について
個人情報保護に関して適用される法令、国のガイドラインを熟読し順守した。また、本研究は琉球大学臨床研究倫理審査規則第9条の規定に基づき、承認を得た。

G. 発表論文等

(研究論文)

- 1) 健山正男：日本におけるHIV診療の現況。日本臨床細胞学会九州連合会雑誌。2010.40: in press
- 2) Nakamura H, Tateyama M, Tasato D, Haranaga S, Yara S, Higa F, Ohtsuki Y, Jiro Fujita: Clinical utility of serum β -D-glucan and KL-6 levels in *Pneumocystis jirovecii* pneumonia. Internal Medicine. 2009. 48
- 3) Toma S, Yamashiro T, Arakaki S, Shiroma J, Maeshiro T, Hibiya K, Sakamoto N, Kinjo F, Tateyama M, and Fujita J: Inhibition of intracellular hepatitis C virus replication by nelfinavir and synergistic effect with interferon- α . J Viral Hepat. 2009 Jul;16(7):506-12.
- 4) Hibiya K, Kazumi Y, Nishiuchi Y, Sugawara I, Miyagi K, Oda Y, Oda E, Fujita J: Descriptive analysis of the prevalence and the molecular epidemiology of *Mycobacterium avium* complex-infected pigs that were slaughtered on the main island of Okinawa. Comp Immunol Microbiol Infect Dis (in press)
- 5) Hibiya K, Utsunomiya K, Yoshida T, Toma S, Higa F, Tateyama M, Fujita J: Pathogenesis of systemic *Mycobacterium avium* infection in pigs through histological analysis of hepatic lesions. Can J Vet Res (in press)
- 6) Hibiya K, Higa F, Tateyama M, Fujita J: The pathogenesis and the development mechanism of *Mycobacterium avium* complex infection. Kekkaku. 2007;82(12):903-18.
- 7) Hibiya K, Nakamura H, Tasato D, Toma S, Furugen M, Yamashiro T, Higa F, Tateyama M, Mochizuki M, Teruya K, Endo H, Kikuchi Y, Oka S, Fujita J: The Importance of

Lymphatic Dissemination after Enteral Infection of *Mycobacterium avium*. -Comparative analysis of porcine carcasses and autopsy cases of patients with AIDS-. *Comp Pathol*.

8) 日比谷健司、比嘉太、健山正男、藤田次郎：人獣共通感染症としての抗酸菌症。Kekkaku. 2007, 82:539-550.

9) 日比谷健司、比嘉太、健山正男、藤田次郎：Mycobacterium avium complex 感染症の病態と進展機序。Kekkaku. 2007. 82:903-918.

10) Gatanaga, Ibe S, Matsuda M, Yoshida S, Asagi T, Kondo M, Sadamasu K, Tsukada H, Masakane A, Mori H, Takata N, Minami R, Tateyama M, Koike T, Itoh T, Imai M, Nagashima M, Gejyo F, Ueda M, Hamaguchi M, Kojima Y, Shirasaka T, Kimura A, Yamamoto M, Hujita J, Oka S, Sugiura W: Drug-resistant HIV-1 prevalence in patients newly diagnosed with HIV/AIDS in Japan. *Antiviral Research*. 2007, 75: 75-82.

(研究報告書)

1) 健山正男、比嘉太、原永修作、田里大輔、仲村秀太、前城達次、山城剛、宮城京子、日比谷健司、藤田次郎：沖縄における薬剤耐性 HIV の調査研究。厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業。薬剤耐性 HIV の動向把握のための調査体制確立及びその対策に関する研究。平成 20 年度総括・分担研究報告書。2009 年, p90-93.

2) 健山正男、仲村秀太、田里大輔、比谷健司、原永修作、比嘉太、藤田次郎、宮城京子：沖縄地域における男性同性間の HIV 感染予防介入研究。厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業。男性同性間の HIV 感染対策とその評価に関する研究。平成 20 年度 総括・分担研究報告書。2009 年, p 75-82.

3) 健山正男、比嘉太、原永修作、田里大輔、仲村秀太、前城達次、山城剛、宮城京子、

日比谷健司、藤田次郎：沖縄における薬剤耐性 HIV の調査研究。厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業。薬剤耐性 HIV の動向把握のための調査体制確立及びその対策に関する研究。平成 19 年度総括・分担研究報告書。2008 年, p90-93.

4) 健山正男、仲村秀太、田里大輔、比谷健司、原永修作、比嘉太、藤田次郎、宮城京子、長谷川博史、宮川桂子、嘉数光一郎、仲根ひろみ、翁長悦子、椎木創一、遠藤和郎、向井三穂子、松田奈月：沖縄の男性同性間感染による HIV 陽性者へのアンケート調査。一急増する地方 MSM 向け予防介入プログラム作成の視点から。厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業。男性同性間の HIV 感染対策とその評価に関する研究。平成 19 年度 総括・分担研究報告書。2008 年, p 83-88.

5) 健山正男：沖縄における薬剤耐性検査確立のための研究、琉球大学附属病院における HIV-1 薬剤耐性検査に関する研究、厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業「薬剤耐性 HIV の発生動向把握のための検査方法・調査体制確立に関する研究」平成 16~18 年度 総括・分担研究報告書」2007 年, p171-173

6) 健山正男：沖縄における薬剤耐性検査確立のための研究、厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業「薬剤耐性 HIV の発生動向把握のための検査方法・調査体制確立に関する研究」平成 18 年度 総括・分担研究報告書」2007 年, p 124-126

(国内学会発表)

1) 田里大輔、仲村秀太、照屋宏充、原永修作、比嘉太、健山正男、藤田次郎：琉球大学医学部附属病院における Raltegravir の使用経験、日本エイズ会誌, 11:462, 2009.

2) 日比谷健司、照屋勝治、仲村秀太、田里大輔、知念寛、比嘉太、健山正男、望月誠、遠藤久子、菊池嘉、岡慎一、藤田次郎：AIDS

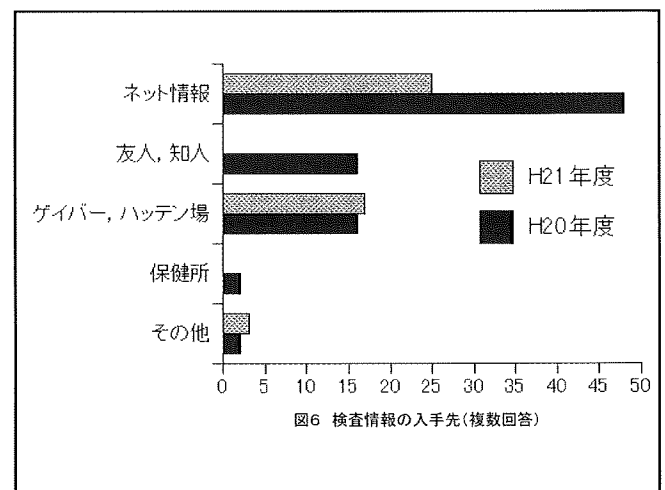
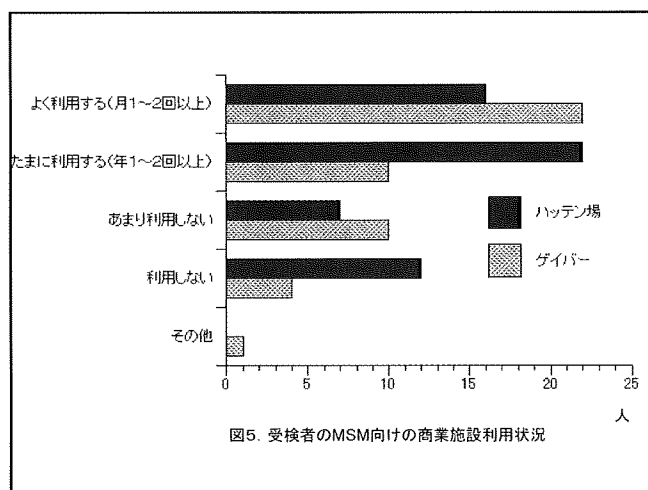
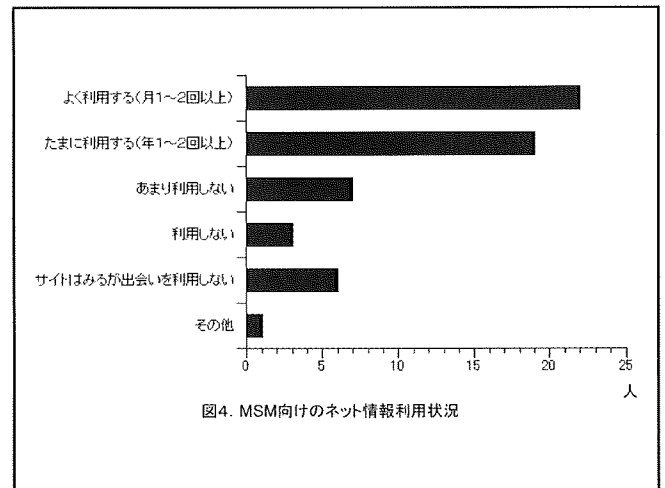
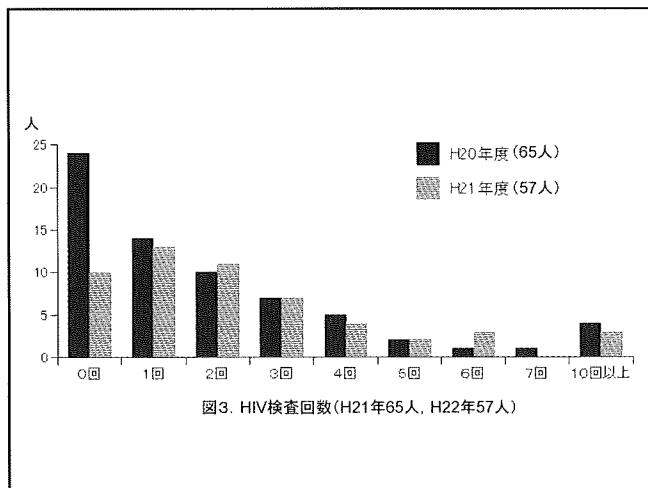
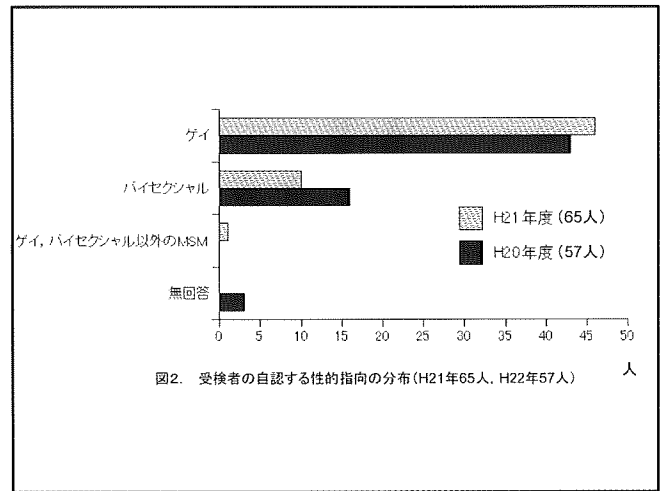
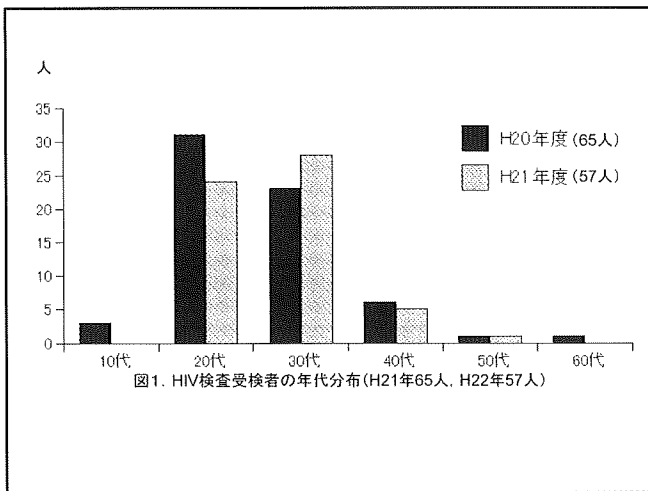
- 関連播種性 *Mycobacterium avium* 感染症の免疫病理分子機構、日本エイズ会誌. 11: 495, 2009.
- 3) 照屋宏充、健山正男、日比谷健司、仲村秀太、田里大輔、原永修作、前城達次、比嘉太、藤田次郎、宮城京子：診断に苦慮した非結核性抗酸菌症、日本エイズ会誌. 11:504, 2009.
 - 4) 仲村秀太、田里大輔、照屋宏充、原永修作、比嘉太、健山正男、藤田次郎：当院 HIV 感染男性患者における COPD の有病率とその危険因子に関する臨床的検討、日本エイズ会誌. 11:513, 2009.
 - 5) 宮城京子、石川章子、石郷岡美穂、仲程ひろみ、嘉数光一郎、向井三穂子、椎木創一、佐久川あや子、健山正男、藤田次郎：沖縄県における自立困難患者の療養環境整備に関して、日本エイズ会誌. 11:541, 2009.
 - 6) 日比谷健司、仲村秀太、田里大輔、照屋勝治、稲垣考、小川賢二、西内由紀子、知念寛、比嘉太、健山正男、望月眞、遠藤久子、菊池嘉、岡慎一、藤田次郎：播種性 *Mycobacterium avium* 感染症の病態解明—AIDS 剖検症例の解析から—、日本臨床免疫学会 Mid Winter Seminar, 2009.
 - 7) 日比谷健司、仲村秀太、田里大輔、照屋勝治、知念寛、比嘉太、健山正男、望月眞、遠藤久子、菊池嘉、岡慎一、藤田次郎：AIDS 関連播種性 *Mycobacterium avium* 感染症の免疫病理分子機構の検討、第 37 回日本臨床免疫学会総会、ワークショップ 2009 年.
 - 8) 日比谷健司、照屋勝治、仲村秀太、田里大輔、知念寛、比嘉太、健山正男、望月眞、遠藤久子、菊池嘉、岡慎一、藤田次郎：AIDS 関連播種性 *Mycobacterium avium* 感染症の免疫病理分子機構、第 23 回日本エイズ学会総会、2009 年
 - 9) 健山正男：地方中核拠点病院における HIV 診療の取り組み—2007 年 HIV/AIDS 比率全国 2 位の沖縄県からの報告—、ランチョンセミナー、日本エイズ会誌. 10:260, 2008.
 - 10) 前田憲昭、溝辺淳子、吉川博政、山本政弘、健山正男、砂川 元、新垣敬一、中川由美子：沖縄県における歯科医療体制構築に関する活動報告、日本エイズ会誌. 10:459, 2008.
 - 11) 前城達次、宮城京子、仲村秀太、原永修作、比嘉太、健山正男、藤田次郎：硫酸アタザナビルによるビリルビン上昇に対するウルソデオキシコール酸投与の効果に関する検討、日本エイズ会誌. 10:487, 2008.
 - 12) 宮城京子、健山正男、大城市子、石郷岡美穂、松茂良揚子、諸見牧子、謝花万寿子、石川章子、田里大輔、仲村秀太、真栄城達次、原永修作、比嘉太、藤田次郎：県内離島病院の診療体制構築に向けての出張研修の成果、日本エイズ会誌. 10:489, 2008.
 - 13) 杉浦互他：2003-2007 年の新規 HIV-1 感染者における薬剤耐性頻度の動向、日本エイズ会誌. 10:545, 2008.
 - 14) 仲村秀太、田里大輔、原永修作、比嘉太、健山正男、藤田次郎：HAART 導入後に免疫再構築症候群として肺サルコイドーシスを発症した一例、日本エイズ会誌. 10:557, 2008.
 - 15) 健山正男：教育セミナー「HIV 関連非感染性肺疾患」、第 61 回日本呼吸器学会九州支部学術講演会.
 - 16) 當間 智、山城 剛、伊禮史朗、小橋川ちはる、渡辺貴子、井濱 康、上間恵理子、富盛 宏、仲村将泉、前田企能、前城達次、岸本一人、仲本 学、平田哲生、金城 渚、外間 昭、佐久川 廣、金城福則、健山正男、藤田次郎：C 型肝炎ウイルス増殖に関する HIV Protease Inhibitor の作用、第 49 回日本消化器病学会総会、日本消化器病学会誌. 104. A684. 2007.
 - 17) 田里大輔、仲村秀太、那覇 唯、原永修作、比嘉太、健山正男、藤田次郎：ST 合剤による 2 次予防中に再燃をきたした AIDS 合併ニューモシスチス肺炎の一例—免疫再構築

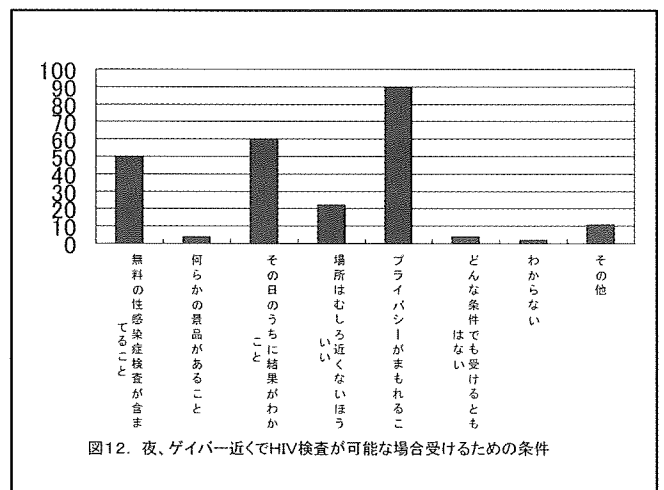
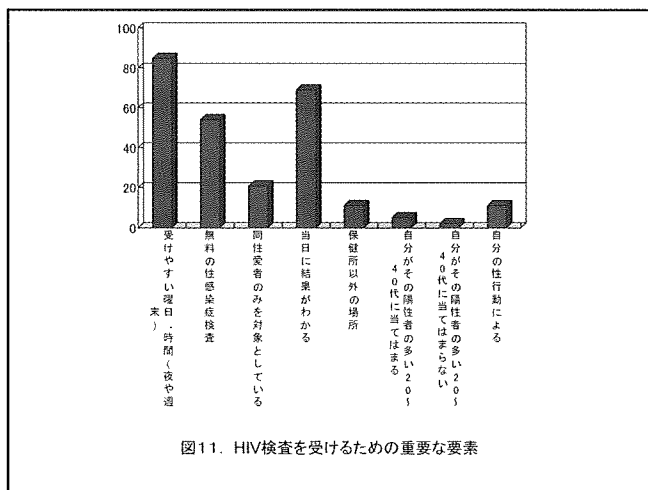
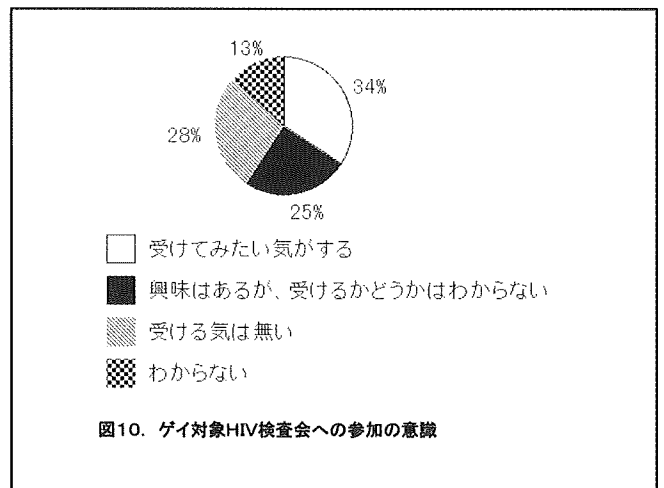
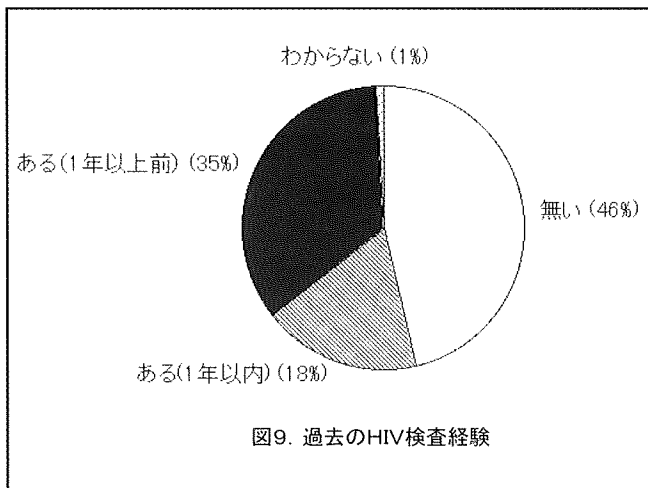
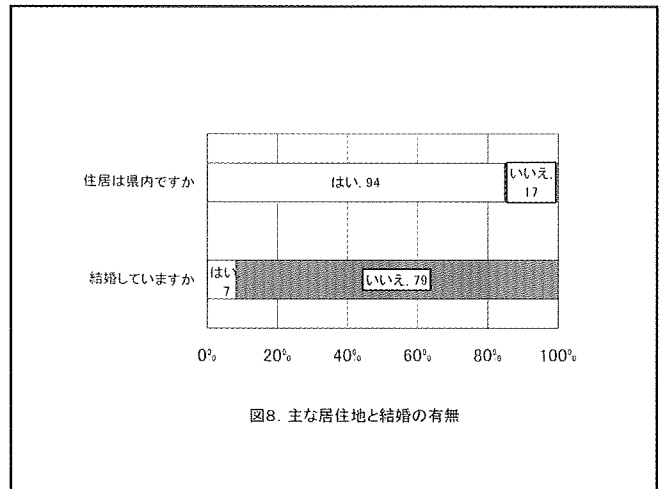
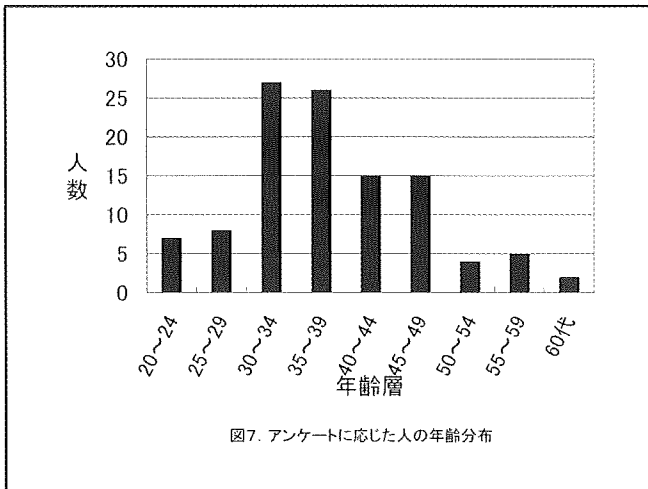
症候群と日和見感染症再燃の異同について
一. 日本エイズ会誌. 9:518, 2007.

- 18) 宮城京子, 健山正男, 諸見牧子, 松茂良揚子, 石郷岡美穂, 大城市子, 石川章子, 田里大輔, 仲村秀太, 比嘉 太, 藤田次郎:
離島病院の医療体制構築に向けて. 日本エイズ会誌. 9. 548, 2007.

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
無し
2. 実用新案登録
無し
3. その他
無し





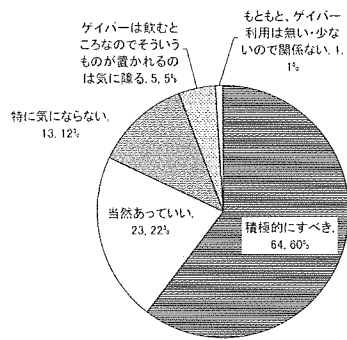


図13 ゲイバーでのHIV予防啓発活動

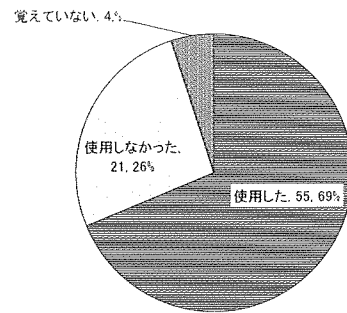


図14. 最後のアナルセックスでのコンドーム使用の有無

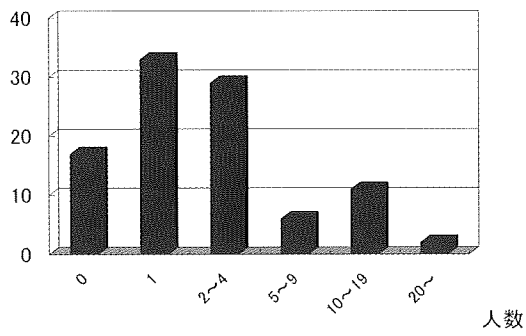


図15. 過去一年間のセックスパートナーの数

コミュニティベースの介入評価のための予防行動調査（量的調査）の実施と分析

研究分担者：金子典代（名古屋市立大学看護学部）

研究協力者：塩野徳史、新ヶ江章友、コーナ・ジェーン（名古屋市立大学看護学部／財団法人エイズ予防財団）、伊藤俊広（国立病院機構仙台医療センター）、佐藤未光（RainbowRing）、内海眞（国立病院機構名古屋医療センター）、鬼塚哲郎（MASH 大阪）、山本政弘（国立病院機構九州医療センター）、健山正男（琉球大学大学院医学研究科）、市川誠一（名古屋市立大学看護学部）

研究要旨

本研究の目的は、東北、名古屋、大阪、福岡地域で実施するゲイ CBO の活動の評価のための量的調査の計画・実施・分析を通して、プログラムの効果評価を実施し、課題を明確化すること、啓発が届きにくい層の明確化と介入手法の試行・評価につなげることを目的とする。また MSM と MSM 以外の層における検査行動、知識、意識等の実態を明らかにし、MSM における HIV 感染予防介入ニーズの明確化に役立たせる。本年度は、東北地域のゲイ・バイセクシュアル男性を対象とした行動科学的調査と RDS 法を用いた携帯電話調査（東北）、ゲイ・バイセクシュアル男性向けのコミュニティイベント（NLGR）参加者に対する調査（名古屋）、ゲイ・バイセクシュアル向け検査会の受検者調査（名古屋）、商業施設利用者を対象とする大規模質問紙調査（大阪）、滞日外国人を対象とするインターネット調査を行い各地域においてコミュニティベースの活動評価資料を得た。また、日本成人男性を対象とした郵送調査を通じて、MSM と MSM 以外の層における検査行動、知識、意識等の実態に関する分析研究を行った。

東北地域では複数のベニューで啓発の評価資料となりうるデータを収集できる体制が整いつつあり、東海地域では、NLGR イベントで来場者のデータを設置型ノートパソコンによる新しい調査方法にて収集し、MSM 向け検査会では高い回収率にて受検者調査を実施し受検者の実態把握も継続的に実施することができた。大阪地域では 2005、2007 年に引き続き大規模な商業施設での精密質問紙調査を実施し、経年的評価により SaL+、dista や PLuS+ イベントなどの介入プログラムの参加や認知の上昇、特定相手との性行動におけるコンドーム常用割合の上昇など介入の効果を示す結果が示されつつある。来年度での各地域での調査の課題をとらえつつ今後も継続的な介入の評価調査の実施が必要である。

A. 研究目的

MSM における HIV/STI 拡大の予防、早期検査受検、受療開始を支援する環境を構築することを目的に、2000 年からゲイ・ボランティア組織（以下、ゲイ CBO）による啓発活動体制を構築し、活動の効果評価を研究してきた。東京、名古屋、大阪、福岡、仙台ではゲイ CBO による商業施設等を介した啓発活動が定着し、その活動の評価

する調査手法も確立されつつある。本研究は、中でも名古屋、大阪、福岡、仙台で実施するゲイ CBO の活動の評価のための量的調査の計画・実施・分析を通して、プログラムの効果評価を実施し、課題を明確化することを目指す。また、MSM の社会的・性的ネットワークを分析し啓発が届きにくい層の明確化と介入手法の試行・評価につなげるもことも目指す。

また、日本成人男性を対象者とした調査を通じて、MSMとMSM以外の層における検査行動、知識、意識等の実態を明らかにし、MSMにおけるHIV感染予防介入ニーズの明確化に役立たせる（資料1参照）。

B. 研究方法

平成 21 年度には下記の調査研究の計画、実施、分析を行った。なお、すべての調査の計画は名古屋市立大学看護学部の倫理委員会から実施承認を得ている。集計分析には SPSS-ver11.5 を用いた。

1. 東北地域のゲイ・バイセクシュアル男性を対象とした行動科学的調査、RDS 法を用いた携帯電話調査（東北）

1) 対象者：①仙台市内で 2009 年に実施されたクラブイベントに参加予定のゲイ・バイセクシュアル男性、②バレーボール大会に参加した 20 歳以上のゲイ、バイセクシュアル男性、③やろっこのメンバーから紹介層を広げ参加協力を申し出たゲイバイセクシュアル男性

2) サンプルング：①クラブイベントの調査では事前にパソコンまたは携帯電話からアクセス可能な調査回答用ホームページサイトを開設し、コミュニティーサイト等を通じて 1 人 1 回の回答を呼び掛ける。②のスポーツイベントでは会場内でスタッフから直接声かけを行い携帯電話による回答を依頼、③やろっこのメンバーが直接またはメンバーが開設する PC サイトを通じてやろっこメンバーの知人に携帯電話による回答を依頼した。一度回答したものはまた知人・友人にアンケートの回答を依頼し、紹介層を伸ばす仕組みを取り入れている。

3) 方法：①のクラブイベント参加予定者は PC または携帯電話からの回答であり、②-③については RDS 法による携帯電話調査である。謝礼は、①クラブイベント参加予定者には、イベント参加割引引きクーポン画像、RDS 調査については電子クーポンとした

2. ゲイ・バイセクシュアル男性向けのコミュニティイベント (NLGR) 参加者に対する調査（名古屋）

1) 対象者：名古屋市内において実施されたゲイ、バイセクシュアル男性向けイベント：NLGR2009 に参加した者

2) サンプルング：会場でフライヤーを用いて直接来場者に声をかけ自由意思でアンケートブースでの回答を依頼した。

3) 方法：アンケートブースに設置したノートパソコンにて各自、回答入力を依頼した。謝礼は名古屋地域で配布する啓発資料であった。

3. ゲイ・バイセクシュアル向け検査会（名古屋）の受検者調査

1) 対象者：ゲイバイセクシュアル男性向けの HIV 検査会を受検した者

2) サンプルング：検査会会場にアンケート回答ブースを設置し、回答者には受付にて質問紙を手渡しを行った。

3) 方法：無記名自記式質問紙調査、一人 1 回の回答を依頼した

4. 商業施設利用者を対象とする調査（大阪）

1) 対象者：MASH 大阪がアウトリーチを行っている大阪市内の商業施設（バー）の顧客

2) サンプルング：参加協力を得られた商業施設の顧客

3) 方法：商業施設のオーナーから調査内容の説明を行い、無記名の質問紙を手渡し、回答は郵送法にて回収される仕組みを採用した。

5. 滞日外国人を対象とするインターネット調査

1) 対象者：日本国内に在住する外国人 MSM

2) サンプルング：クラブイベント等にて調査回答依頼のフライヤーを配布、ゲイ CBO スタッフやバーオーナーからの直接の声かけ、HP での広告バナーを用いて宣伝を実施した。

3) 方法：インターネットサイトに開設された

調査ページに回答者が任意でサイトにアクセスし回答をオンラインでの送信する方法を用いた。

C. 研究結果

1. 東北地域のゲイ・バイセクシュアル男性を対象とした行動科学的調査、RDS 法を用いた携帯電話調査（東北）

クラブイベント参加者向け調査では、東北地域にて 360 件を超す回答が集まり東北地域在住の MSM263 件を分析対象とした。20-30 歳代が 77%を占め、居住地は宮城県が 62%であった。生涯の HIV 検査受検経験は 49%、検査場所は保健所が受検者のうち 51%と最も多かった。特定相手とのコンドーム使用はタチ 50%、ウケ 48%、その場限りの相手とはタチ 57%、ウケ 61%であった。

RDS 法を用いた調査では、バレーボール大会参加者層では 42 件の回答が、ゲイ C B O やろっこをとりまくネットワークからは 80 件の回答を収集した。いずれの調査においても紹介層が第 3、4 層まで拡大した。基礎属性はやろっこメンバーからのネットワークの方がバレーボール大会層よりも年齢が高く（30 歳以下 81% vs 62%）、ゲイ向け商業施設の利用頻度、生涯の HIV 抗体検査受検経験割合（53% vs 57%）も高かった。やろっこが配布するコンドームは、バレーボール大会参加者では 65%、やろっこメンバーのネットワーク層では 52%のものに持ち帰り経験があった。コンドームの常用割合に関しては特定、その場限り相手、タチ、ウケいずれの場合においてもやろっこからのネットワークの方がバレーボール大会参加者層よりも高かった。

2. ゲイ・バイセクシュアル男性向けのコミュニティイベント（NLGR）参加者に対する調査（名古屋）

イベント NLGR では総計 511 名からの回答を得た。東海地域に居住するゲイ、バイセクシュアル、または決めたくない自認するもの 271 名の対象者を分析対象者とした。対象者

の属性については、年代は 25 歳未満が 22.9%、25-29 歳が 22.9%、30-34 歳が 19.2%とほぼ均等に分布しており、名古屋市、名古屋市を除く愛知県居住者がそれぞれ 37.9%、46.4%と合わせて 8 割以上を占めていた。ALN の活動の認知は年齢が高い層で高い傾向が見られ、ホームページ、STI 勉強会では 40 歳以上における、見た（参加）または知っていると回答した割合が、それぞれ 55.0%、47.5%と高かった。生涯の HIV 検査受検経験は 25 歳以上の年齢層ではいずれも 70%を超しており、全体平均では 76%であった。コンドームの常用率は、特定相手、その場限りの相手ともに 35 歳以上の年齢で高かった。

3. ゲイ・バイセクシュアル向け検査会（名古屋）の受検者調査

NLGR 代替検査会における HIV 陽性率は 4.7%、M 検では 1.4%であった。NLGR2009 代替検査会では 105 名、また M 検では 71 名の東海地域在住の MSM からの有効回答を分析対象とした。年齢は 20-30 歳代が過半数を占めていた。代替検査会、M 検双方において生涯検査受検、過去 1 年検査受検経験は高く検査場所として過去の NLGR や M 検を挙げたものが多かった。生涯初めて受検する者の方が、年齢が若く、過去に性感染症の既往があるものが多かった。

4. 商業施設利用者を対象とする調査（大阪）

MASH 大阪が資材のアウトリーチ等を行っているゲイバー 88 店舗に 2433 部配布し 1610 通の回答を得た。そのうち、近畿圏に居住する男性かつ性指向をゲイ、バイセクシュアル、わからないと自認している 1354 名を分析対象とした。コミュニティスペース dista の認知、SaL+の認知、はそれぞれ 58.4%、69.7%であり、2005、2007 年と比較しても上昇がみられていた。PluS+のイベントの認知と参加率はそれぞれ 66.8%、24.0%であり、2005 年の 26.4%、4.1%と比較しても上昇がみら

れた。

生涯検査受検経験、過去1年の検査受検経験はそれぞれ51.8%、26.8%であり、経年的な変化は観察されなかった。

コンドーム常用者割合は、特定相手とは42.6%、その場限りの相手とは54.0%であった。相手別のコンドーム常用割合は経年的にみても特定相手、その場限りの相手それぞれ2005年は34.1%、44.9%であったのが2009年には42.6%、54.0%と上昇がみられている。

その他にも健康保険の所有割合や保険を所持していないものの方が検査受検経験が低いこと、検査受検を断られた経験とその時期についても尋ねたが、2009年の1年間に検査受検を断られた経験を持つ割合が2007、2008年より多いことが明らかとなった。またHIV陽性者の差別や偏見が減ったと感じているものは若い年齢層の方が多いことも明らかになった。

5. 滞日外国人を対象とするインターネット調査

滞日外国人MSMをターゲットとして調査を実施し、50件のデータを収集した。(平成21年12月現在)回答者のうち、性指向をゲイと自認するものは54%、バイセクシュアルが10%であり、年代は20歳代のものが最も多かった。国籍は米国が最も多く日本が次に多かった。HIV検査受検経験と検査の利用しやすさについても質的データを収集した。

D. 考察

東北地域においては、過去にもスポーツイベント参加者、やろっこを中心とするネットワークにおけるRDS調査、クラブイベント参加者を主に対象とするインターネット調査を実施してきた。本年度は、クラブイベント参加者向けの調査、スポーツイベント参加者、やろっこをとりまくネットワークに対する調査を実施した。

クラブイベント参加者向け調査は、東北地域

在住の263名からの有効回答を得たことで、東北地域でクラブイベントの参加に関心を持つMSMの実態を把握する貴重なデータ収集手段となった。40歳以上の層では検査受検経験が35%と低く今後の介入の展開が必要となる。RDS法を用いた携帯電話調査ではバレーボール大会参加者、やろっこのメンバーから紹介層を広げ総計122件の回答を得た。やろっこがアウトリーチを行っているコンドームは、半数以上のものが持ち帰り経験があるものの、バレーボール大会者層の方が生涯HIV検査受検経験やコンドームの常用割合が低いことが示された。バレーボール大会参加者調査は、対象者人数が少ないこともあるため、今後はさらに対象者人数を確保するための工夫が必要となる。

東北地域においても、複数のベニューでの調査が実施可能となり、活動な評価が可能となる体制が整いつつあり今後も調査の継続的実施が必要である。

ゲイ・バイセクシュアル男性向けのコミュニティイベント(NLGR)参加者に対する調査(名古屋)では、ノートパソコンを設置し会場でデータ収集を行うのは初めての試みを行った。回答の所要時間も5分程度であり、操作に関してもトラブルや苦情はほとんど見られなかった。データ収集・入力・分析の労力の省力化という点からも簡便性と実施可能性が示された。NLGRイベントに参加した東海地域居住のMSMの生涯のHIV検査受検経験は76%、過去1年の受検経験は45%と高率であった。他の地域のクラブイベント調査と比較しても、本調査分析対象者の30歳後半から40歳台における検査受検経験率は高く、2001年から実施してきたNLGR検査会、名古屋や愛知県内での検査体制の整備の有効性を示唆する結果となった。今後は20歳代前半層の予防介入ニーズの明確化、ゲイ向けイベントに来場しないが介入の対象者となっているゲイバーのクライアントの実態把握の必要があるだろう。

2000年より継続的に実施してきたゲイ・バイセクシュアル向けイベント NLGR での検査会（名古屋）の受検者調査は、本年度は新型インフルエンザ対策のため NLGR にて検査会が実施できなかった。そのため9月に実施した代替検査会、昨年より実施しているM検にて受検者調査を実施した。今年度のM検においては、陽性率が1%と低かったが、過去のNLGRにおいても陽性率は、1-5%台を推移しており、受検者の年齢層、コミュニティーへのアクセス、検査会を知ったきっかけなどの要因が陽性率の変動に影響していることが考えられる。アンケート結果から検査受検経験のある者が多く受検したこと、NLGR代替検査会から間隔が開いていなかったため検査機会がなく、感染リスクがない層に働きかけるには時間が不十分であった可能性が考えられた。

大阪地域の商業施設利用者を対象とする調査では、(dista, SaL+の認知、PluS+のイベントの認知や参加割合は2005、2007年より上昇しており、介入の継続効果が確認できつつある。また過去6か月のアナルセックス時のコンドーム常用割合に関しては2005、2007年のバー調査と比較しても特に特定相手との使用に関しては上昇がみられている。2009年における対象者の生涯の検査受検経験は51.0%であり、過去の調査と著変は見られないが2009年の1年間でHIV検査を受検しようとして断られた経験を持つものが2007年、2008年より多かったことが示されており、大阪地域でのHIV検査受検環境の悪化の実態と環境の改善が急務であることが示された。3回の調査から得た結果をもとに今後も更なる効果的な介入を行う必要がある。

滞日外国人を対象とするインターネット調査は現在データを収集中であるが、様々な国籍のMSMからのデータが収集されつつある。滞日外国人MSMは今後も増加していくことが予測され、実態とニーズの把握は非常に重要な課題となっている。最終的に収集されたデータを通じて外国人のHIV検査の受検の阻

害要因の多様さ、健康サービスへのアクセスのニーズについても今後示していく予定である。

E. 結語

本年度も各地域において、コミュニティーベースの啓発の活動評価のための評価調査を実施した。東北地域では複数のベニューで啓発の評価資料となりうるデータを収集できる体制が整いつつあり、東海地域では、NLGRイベントで来場者のデータを収集し、検査会受検者の実態把握は継続的に実施してきている。大阪地域では2005、2007年に引き続き大規模な商業施設での精密質問紙調査を実施し介入の効果を示す結果が出つつある。来年度での各地域での調査の課題をとらえつつ（表1）今後も継続的な介入の評価調査の実施が必要である。

F. 発表論文等

（研究論文）

- 1) 新ヶ江章友, 金子典代, 内海眞, 市川誠一: HIV抗体検査会に参加した東海地域在住MSM (Men who have Sex with Men)の性自認とHIV感染リスク行動, 日本エイズ学会誌, 11(3), 255-262, 2009.
- 2) 井戸田一朗, 金子典代: アジア太平洋地域のMSMとTGにおけるエイズ対策—アジア太平洋地域のMSMとTGにおけるエイズ対策専門家会議の報告を中心に—, 日本エイズ学会誌, 11(3), 210-217, 2009.
- 3) 日高庸晴, 金子典代: Men who have sex with MenにおけるHIV感染の動向と行動疫学調査から見える現状, 日本エイズ学会誌, 1(1), 2010. (刊行予定)
(国際学会発表)
- 1) Akitomo Shingae, Noriyo Kaneko, Makoto Utsumi, Seiichi Ichikawa: Differences between Two Samples of MSM attending HIV Testing Events in Nagoya, Japan, the 9th International Congress on AIDS in Asia

- and the Pacific, Indonesia, 2009
- 2) Akito Mo Shingae, Noriyo Kaneko, Satoshi Shiono, Yuya Makizono, Daisuke Kawamoto, Kiyoko Kitamura, Toshihiko Nino, Suguru Hashiguchi, Shiro Hamada, Toshihiro Yamamoto, Seiichi Ichikawa: Characteristics of MSM who are 'Inconsistent and Non-Condom Users': Findings of the Gay Bar Survey, the 9th International Congress on AIDS in Asia and the Pacific, Indonesia, 2009 (国内学会発表)
- 1) 塩野徳史, 市川誠一, 金子典代, コーナ・ジェーン, 新ヶ江章友, 伊藤俊広: 日本人男性における MSM (Men who have sex with Men) 人口の推定, 第 23 回日本エイズ学会学術集会・総会, 名古屋, 2009
- 2) コーナ・ジェーン, 塩野徳史, 金子典代, 新ヶ江章友, 市川誠一: 日本在住成人男性を対象とした男性同性間の性行動・性意識調査-MSM 人口に関する海外の調査を日本との比較から-, 第 23 回日本エイズ学会学術集会・総会, 名古屋, 2009
- 3) 太田貴, 伊藤俊広, 金子典代, 小浜耕治: 東北地域における男性同性間の HIV 感染対策-ゲイ・ボランティアグループ「やろっこ」の活動展開-, 第 23 回日本エイズ学会学術集会・総会, 名古屋, 2009
- 4) 金子典代, 岩橋恒太, 張由紀夫, 荒木順子, 砂川秀樹, 塩野徳史, コーナ・ジェーン, 生島嗣, 佐藤未光, 市川誠一: 携帯電話による RDS 法を用いた首都圏での啓発プログラム評価, 第 23 回日本エイズ学会学術集会・総会, 名古屋, 2009
- 5) 河邊宗知, 張由紀夫, 荒木順子, 柴田恵, 木南拓也, 岩橋恒太, 塩野徳史, 金子典代, 佐藤未光, 木村博和, 市川誠一: 新宿 2 丁目における予防啓発プログラムの効果の検討: その 2-バーアンケート調査から-, 第 23 回日本エイズ学会学術集会・総会, 名古屋, 2009
- 6) 新ヶ江章友, 金子典代, 塩野徳史, 牧園裕也, 川本大輔, 新納利弘, 濱田史郎, 橋口卓, 北村紀代子, 山本政弘, 市川誠一: 福岡におけるゲイ向け商業施設利用者を対象とした質問紙調査, 第 23 回日本エイズ学会学術集会・総会, 名古屋, 2009
- 7) 新ヶ江章友, 金子典代 (組織・座長): MSM 社会とのインターフェイス-臨床・検査・社会の協働 (若手企画/臨床・社会コラボシンポジウム), 第 23 回日本エイズ学会学術集会・総会, 2009 年 11 月, 名古屋.
- 8) Noriyo Kaneko, Yukio Cho, Yuzuru Ikushima, Jane Koerner, Seiichi Ichikawa: LIVING TOGETHER Strategy-Tokyo Group Evaluation of the LIVING TOGETHER project, Ministry of Health, Labour and Welfare, Japan Asian Administrators' Meeting.